家具製造

やまとわ代表取締役＆家具職人・中村博さん

森林伐採への問題意識から生まれた アカマツを使った家具

パイオニアプランツという家具のブランドがある。
使っている木材は、家具材としては一般的ではないアカマツだ。
なぜ、アカマツなのか…。
そこにはつくり手たちの森林問題に対する真摯な思いがある。

輸入木材への依存度が高い森林国・日本

家具ブランドのパイオニアプランツは、いす、スツール、トレイ＆レッグなど信州伊那谷のアカマツでつくられた製品を製造・販売している。いすやスツール、トレイ＆レッグなどはいずれも折り畳むことができ、子どもでも持ち運べるほど軽い。巣箱のようなデザインのボックスは、中にスマートフォンを入れて音楽を楽しむ、電気を使わない木製スピーカー。バッグは、ピクニックに行くときなどに食べ物を入れるのにうってつけだ。

パイオニアプランツとは、ある場所が裸地になったとき、その土地の風土に合って最初に育つ植物のこと。アカマツは信州伊那谷のパイオニアプランツである。

パイオニアプランツを展開する株式会社やまとわの中村博さんが家具づくりにアカマツを使うようになったのは、日本の森林問題について知ったことがきっかけだった。

「家具職人を始めた頃は、僕もブラックオールナットとかホワイトオークといった輸入材を使っていました。その当時、日本の木材自給率は18％程度しかなく、80％以上を海外からの輸入材に依存していたのです。それを知って、世界中でものすごい勢いで森林が減少していることに、僕自身も加担しているのではないかと考えるようになりました」

日本は国土のおよそ７割が森林だ。その森林を戦前、戦中に大量伐採したため、戦後は積極的に植林を行った。植えた樹種の多くは杉だった。ところが安くて良質な輸入材が大量に入ってきたため、植林してつくられた人工林は間引きも枝打ちもされず、放置されることが多くなっていた。

国内に使える木があるにもかかわらず、多くの木材を輸入している。そうした実情を知った中村さんは、「地元の木を使った木製品をつくることで、日本や世界の森林が抱える問題の解決に少しでも貢献できるのではないか」と考えた。

家具づくりに アカマツの性質を活かす

当初の５年間はたった一人で木工品をつくるワークショップなどを開きながら情報発信をしていたが、一人では限界があると気がつき2016年、やまとわを設立した。やまとわは、漢字にすると「山杜環」となる。自然と里山をつなぎ、循環する社会をつくっていくとの意味がそこに込められている。

日本の森を健全に循環させ、再び森と人の暮らしを近づけることを目指す中村さんたちは、農林業や森のプランニング、そして地元・伊那の木を使ったものづくりを始めた。

「長野県が使用を推奨していたので、僕も最初はカラマツを使いました。でも、カラマツには針葉樹合板に使

幅ハギ板にカンナをかけ、滑らかに仕上げていく。削りカスからは爽やかな木の香りが漂い、工場を満たす。やまとわでは、アカマツだけでなく栗やクルミなど、地元の木材を加工している

なかむら・ひろし（前列右から２人目） 1969年、長野県伊那市生まれ。最初の就職先だった郵便局を29歳のときに辞め、木工職人に。その後、日本の木材自給率の低さ、放置された人工林などの問題に気づき、地元の木を使うことでの問題解決を目指すように。当初は一人で活動していたが、2016年に株式会社やまとわを設立。現在は農林を軸に、地元産のアカマツを使った家具づくりなどに取り組んでいる。登山は冬山にも登る本格派

写真左上、使われるアカマツは、戦後に植林された樹齢70年前後のものが多い。写真左下、出来上がった木板に樹脂を塗り、製品として仕上げていく

われる市場が徐々に形成されていき、高価格で売買されるようになりました。そこで次に地元で多い樹種を調べたら、上伊那の森林の21％くらいがアカマツであることがわかったのです」

その頃、伊那谷でも病害虫のマツノザイセンチュウによる松枯れが始まっていた。枯れてしまった木は切って廃棄するしかない。ならば、松枯れが起きて廃棄される前にアカマツを使おう。そう考えた中村さんたちは、2017年からアカマツを使った家具づくりを始めた。しかし、家具づくりで一般的に使われるのはナラやブナなどの広葉樹で、針葉樹のアカマツが使われることは決して多くないという。

「アカマツは幹がまっすぐではなく曲がっているので商流に乗りにくいと思われがちなのですが、職人が木に寄り添ったものづくりをすれば、いいものができます。アカマツは全体に適度な油分を蓄えているので、手触りがしっとりして粘り強い特質を持っています。また、一般的に家具に使われる広葉樹に比べて柔らかくて軽いのですが、杉のように乾ききってしまうと加工しにくいということもなく、逆目でも削ることができます。こうしたアカマツの特徴を活かした家具づくりを考えました」

室内でも屋外でも使える軽さと便利さ

2020年、中村さんはアカマツを使った家具ブランドのパイオニアプランツを立ち上げた。

パイオニアプランツの家具は、小さな折り畳み式。軽いので部屋から部屋、１階から２階へと簡単に持ち運ぶことができ、折り畳めるので収納もしやすい。無垢材なので室内の雰囲気を邪魔することなく、屋外で使うときも自然の景観とよくマッチする。天気のいい日には庭に出して使ったり、ピクニックやキャンプに持っていったりするなど、多様なシーンで活躍する製品だ。また、パイオニアプランツの家具は再利用しやすい設計になっており、不要になったものは回収して新たな木製品の材料として活用することもできる。

「2020年にブランドを発表した直後、新型コロナウイルスの感染拡大が始まり、予定していた展示会出品などがほとんどできなくなってしまいました。でも今はＥＣによる直販のみですが、売れ行きは順調です。木工製品も機械でつくる時代ですが、手で触る家具には一本一本の木のよさ、特徴が出るため、手づくりにこだわ

写真中央、アカマツでつくられたウッドチェアは驚くほど軽く、座ると適度にしなるため座り心地もよい。写真右、やまとわでは、家具や木材に加えて経木もつくっており、海外でも人気

っています」

そういう中村さんたちは、地元産のアカマツを使って、木を薄く削った包装材である経木（きょうぎ）もつくっている。アカマツは抗菌作用があるといわれ、アカマツの経木は江戸時代から食品を包むときなどに使われてきた。本連載でも、2017年の春号（131号）で群馬県の阿部経木店を紹介したことがある。驚いたことに、中村さんはその阿部経木店に「とてもお世話になった」という。

「経木と出合ったのは2016年の初頭でした。難しくてつくれるようになるまで1年半くらいかかりましたが、そのときいろいろ教えていただいたのが阿部経木店の阿部初雄さんたちです。国内では一般ユーザー向けの経木のパッケージ品をお取扱いいただいているお店が100店舗以上あり、納豆屋さんやお肉屋さんからの需要もあります。海外では経木を使ったノートが好評で、今は生産が追いつかないほどです」

森林の価値を一人でも多くの人に伝えたい

やまとわは、パイオニアプランツの製品のほかにオーダーメイド家具やオフィス用の家具などもつくっており、今年は新たに住宅づくりにも挑戦する予定だ。アカマツだけではなく栗やクルミ、桜などの地域産材も使用しているが、中村さんたちは山に入ってどんどん木を伐採しているわけではない。道路をつくるときに切られた木や、大きくなりすぎて切られた街路樹などを引き取って利用することも多い。また経木を削った後の端材を利用して壁材をつくるなど、資源の有効活用に気を配っている。

2016年の会社設立時には5名だった社員が、今は23名。その半数以上は県外から移住してきた若い人たちだ。

「森林は、水や空気、鳥や昆虫を生み出し、素晴らしい価値を人間に与えてくれます。そういう価値を一人でも多くの人にわかってもらえるような活動をこれからも続けていきます。同じ思いを持っている人は日本にも世界にもいる。その人たちとつながれば、きっと何かが変わるはずです」

林業や農業という伝統的な産業に基盤を置きながら、資源循環型の新しいソーシャルビジネスを生み出し、社会を変えていこうとする中村さんたち。今はまださやかなムーブメントだが、日本の未来はこういうところから開けていくのかもしれない。